

## まちのプレーヤー支援のための空間デザイン

ー浜松鍛冶町大通り空きビルを事例としてー

### 1. 制作の背景と目的

浜松市中心市街地は、空洞化や住民の高齢化によって環境が大きく変化し、まちなかににぎわいが減っているのが現状である。そこで、鍛冶町大通りを中心としたまちなかににぎわいを生む、市民活動の拠点となる場を作ることが出来ないかと考えた。本制作は、鍛冶町アクティビティセンター（＝鍛冶町大通りを中心としたまちなかに興味のある方と一緒に、大通りとその周辺の暮らしと商いをより良くするための具体的なアイデアを出し合う場、以下 KAC と略す）での取り組みとして、鍛冶町大通りにある空きビルでの市民活動を充実させることで、まちなかに人が集まるきっかけとなるアクティビティ支援を目的とするものである。

### 2. 制作に至る手順

まず、以下の調査を行った。

#### 2.1 基礎調査

- 1) 浜松市の中心の変遷と形成調査
- 2) 浜松市上位関連計画の整理
- 3) KAC による「鍛冶町通り魅力発見調査」に関するアンケートの整理と分類

#### 2.2 現地調査

- 1) 鍛冶町大通り周辺の現地調査
  1. 歩行者交通量調査の現況
  2. 浜松まちなか歩行者空間調査
- 2) 中心市街地で催されるイベント調査
- 3) デザイン対象のビル調査
  1. テナント入居の分布調査
  2. 対象の空きビル調査

駅前に対し、鍛冶町大通りの歩行者交通量が少ない現況から、鍛冶町大通りに市民交流の拠点を設けることにより、駅周辺の賑わいを鍛冶町大通りまで誘導する必要性が明らかになった。また、周辺の歩行者量の空間的

な分布を調査し、歩行者の回遊状況を把握する必要があると考え、周辺ルートの歩行者空間調査をした。拠点でイベントを開催するにあたり、既に行われているイベントでのにぎわい要素を先行事例として調査した。

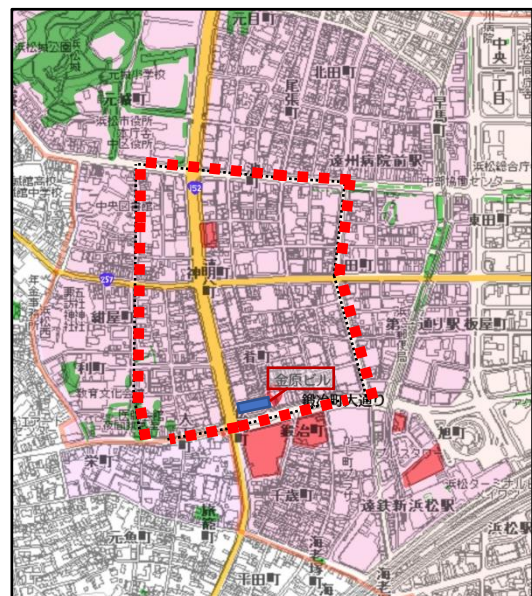
### 2.3 KAC での取り組み

2015 年に浜松市中心市街地の中央地区に対してアンケートを実施している。回答を分類整理することでアンケートに寄せられた、まちなかの改善したい場所と要望を知ることが出来た。それらをワークショップで作られた『100 のアイデアブック』のプロジェクトと関連付け、KAC がイベントのスタートアップを支援し、定期性や常設性を持つまでに至る段階性を設定した。

### 2.4 対象となる場に必要となる要因

これまでの調査から、まちの使い手としての市民に望まれ、活用しやすい場の要因を抽出した。

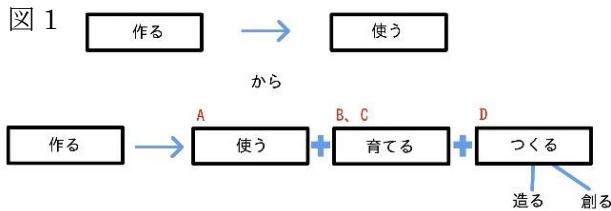
- ① 多様な人が自由に交流し、憩う空間があること
- ② まちなかを快適に繋ぐ歩行者ネットワーク（回遊性）があること



### 3. 基本方針

鍛冶町大通りの空きビルを利活用した市民活動（＝アクティビティ）の拠点を作り、KAC で案出された 100 のアイデアを実施できる場所とすることを基本方針とした。あくまで KAC は支援をする側であり、まちなかにアクティビティを起こしたい人（＝プレイヤー）のスタートアップの場とし、個々の活動を空間的に支援する仕組みを検討した。

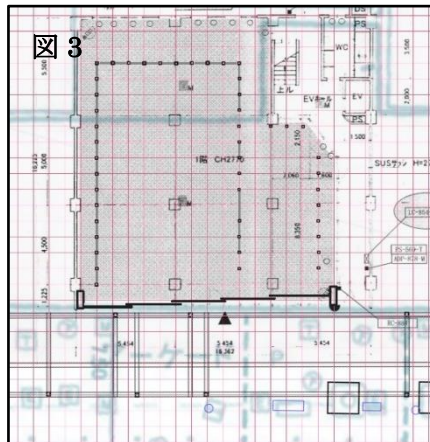
商店街の空きビルにテナントを入れて商業機能をもつ（場を作り⇒使う）のではなく、空きビル内部と外部歩行者空間を一体的に活用した滞留空間を考え、スタートアップのアクティビティの場を空間づくりの側面からデザインした。（場を作り⇒使う＋アクティビティを育て、場を育てる）。将来的に多世代が互いの活動を通して交流できる、生活拠点の核として展開されていく（新たな拠点を造る、アクティビティを創る）段階性を設定している。（図 1：アクティビティの段階性）



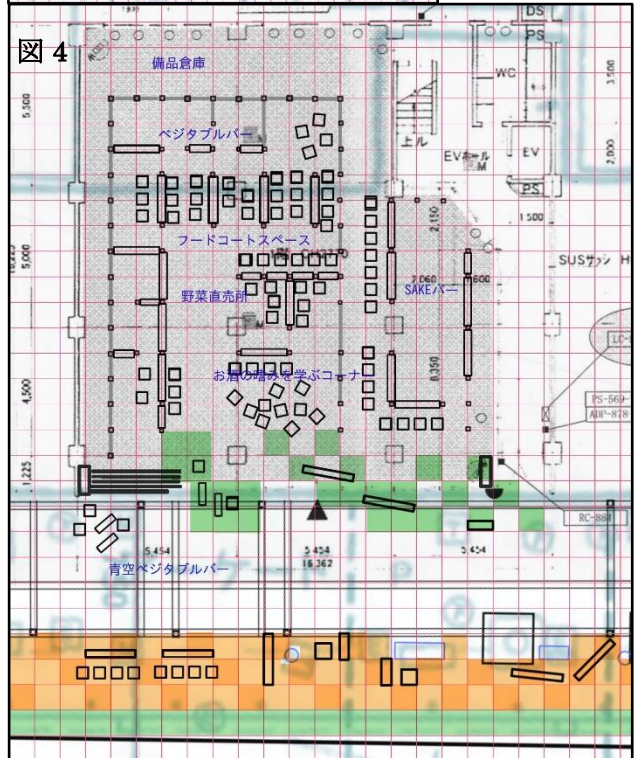
### 4. 空きビルの利活用のための場

空きビルを単に修繕して現状回復するのではなく、建物の存在意義を変えて建物の価値を高め、人が集まる拠点へと展開する。まずは短期のイベントから徐々に中長期の催しを経て、将来的にプロジェクトが定着すれば、ハード面の整備をするという柔軟な使い方ができる場を設定した。スタートとなる短期的なプロジェクトにおいて、プレイヤーが利用したいスペースを容易に設定でき、机や棚、

仕切りが設置できるツール（図 2）を用いてアクティビティを行ったときの空間の使い方を示す。（図 3、図 4）



（図 3）  
空きビル内に  
900mm グリッドに沿って  
柱を立てる



（図 4）  
イベント  
開催例

また、ビル前の街路にも共通のグリッドを取り入れ利用できるようにすることで、アクティビティが外にも広がる、民間ビルと公共空間が連携する場を生み出すことが出来る。これを周辺の空きビルや街路に応用することで、まちの回遊を生み出していくことが今後の課題である。

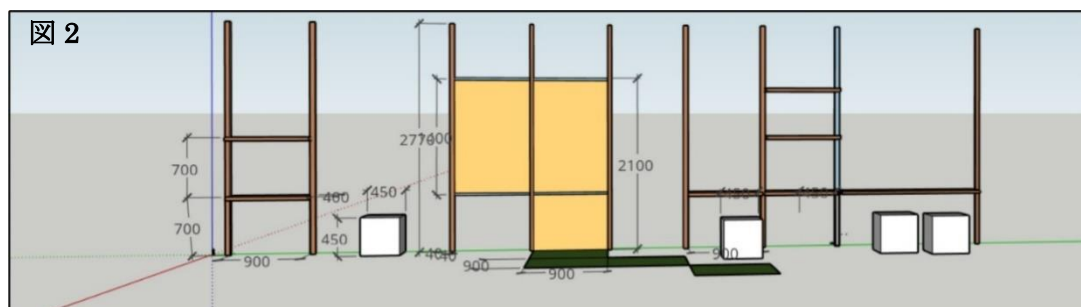


図 2